

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
鹿沼市	さつきが丘小学校	639
足利市	山辺中学校	640

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 平成30年度の重点課題

- ① 各種学力調査の分析結果に基づく検証改善サイクルの自校化
- ② 当該学年の学習内容の確実な定着を図る授業づくり
- ③ 各種学力調査の分析結果を踏まえたカリキュラム・マネジメントの推進

(2) 研究の内容

① 「とちぎっ子学力アッププロジェクト」における具体的な取組内容

i 平成30年度とちぎっ子学習状況調査

- ・ 調査の実施日：平成30年4月17日（火）
- ・ 参加校数：525校、参加人数：48,538名
- ・ 調査結果送付：平成30年6月30日に各小・中学校及び各市町教育委員会に送付

ii とちぎっ子学力向上応援団派遣事業

- ・ 10名の学力向上専門員を177校に派遣
- ・ 1校当たり年間5回程度訪問し、学校の課題解決に向けた取組を支援

iii 学力向上推進リーダー配置事業

- ・ 県内19市町に学力向上推進リーダー25名を配置
- ・ 県教育委員会主催の研修を実施（年間10回）
- ・ 小学校国語科及び算数科について、指導の充実を図るための栃木県小学校教育研究会宇都宮支部国語支部研究会及び算数支部研究会への参加

iv 学力調査結果活用研修会

- ・ 対象：県内小中学校学力向上担当者 等（各校1～2名）
- ・ 内容

とちぎっ子学習状況調査及び全国学力・学習状況調査の分析結果から明らかになった県全体の課題等について説明するとともに、学習指導の工夫・改善やカリキュラム・マネジメントの推進に関する講話を行った。

- ・ 開催日及び参加校数、講師等

小学校 平成30年6月21日（木） 参加校数 370校、参加人数 399名

講師 文部科学省 国立教育政策研究所

教育課程研究センター研究開発部 学力調査官 伊坂 尚子 氏

中学校 平成30年6月22日（金） 参加校数 168校、参加人数 175名

講師 早稲田大学教職大学院教職研究科 教授 田中 博之 氏

v 学力調査結果活用説明会の実施

- ・ 対象：県内市町指導主事
- ・ 内容

第1回では、とちぎっ子学習状況調査及び全国学力・学習状況調査の分析結果を基に、担当指導主事が、今後の取組について説明及び周知を図るとともに、各市町教育委員会における学力向上の取組について情報交換を行った。

第2回では、全国学力・学習状況調査の分析結果を踏まえ、学習指導の改善及び充実に向けた講話・演習を行った。

- ・ 開催日及び参加校数、講師等

第1回 平成30年9月7日（金） 参加人数 56名

第2回 平成30年10月10日（水） 参加人数 53名

講師 文部科学省 国立教育政策研究所

教育課程研究センター研究開発部 学力調査官 伊坂 尚子 氏

教育課程調査官 笠井 健一 氏

vi 指導資料及びリーフレット等の作成・配布

- ・ 平成30年度とちぎっ子学習状況調査報告書 : 1,300部
- ・ 平成30年度全国学力・学習状況調査結果資料 : 2,000部
- ・ 教師用各教科指導資料 : 国語科 1,300部、算数科 1,300部
- ・ 保護者用リーフレットの作成・配布 : 小学校 63,600部、中学校 38,400部

vii 学力向上研究協議会（学力向上検証委員会）

とちぎっ子学力アッププロジェクトに関する様々な施策の検証を行った。

また、検証結果等を基に、県教育委員会が推進する今後の学力向上対策の方向性について協議した。

	開催日	主な内容
第1回	平成30年8月28日(火)	○平成30年度とちぎっ子学力アッププロジェクト ○平成30年度全国学力・学習状況調査及び とちぎっ子学習状況調査の分析結果 ○今後の学力向上策 ・ とちぎっ子学力向上応援団派遣事業 ・ 学力向上推進リーダー配置事業
第2回	平成30年12月12日(水) 12月17日(月)	○とちぎっ子学力向上応援団派遣事業の検証 ○学力向上推進リーダー配置事業の検証
第3回	平成31年2月4日(月)	○本県の学力向上対策の検証及び次年度以降 の取組について

② 推進地区及び協力校に対する支援

i 学習指導の改善・充実に向けた取組の充実

- ・ 協力校が実施する授業研究会等に県教育委員会指導主事が複数回訪問し、指導・助言を行うとともに、推進地区や協力校の求めに応じて、全体会や校内研修等にて講話・演習を行った。

ii 指導資料の作成・配信

- ・ 協力校を含む県内の小・中学校に対して、学力向上に向けた取組を推進する上で有効な情報（調査問題等の分析を基にした学習指導の改善・充実にすること及び年間のPDCAサイクルの運用に関することなど）を掲載した学力向上通信を年間8回作成し、ホームページ上に掲載した。

2. 推進地区における取組

(1) 鹿沼市における取組

① 指導体制の構築

② アドバイザーの配置

③ 協力校校内研修への指導・助言

ア 本研究の概要の説明

イ 授業づくりにおける指導・助言

④ ワーキンググループによる「振り返り」を生かした授業づくりの実践

⑤ 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施

⑥ 中学校との連携

⑦ 市民への情報発信

(2) 足利市における取組

① わかる授業の展開

- i 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の工夫・改善
- ii 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の工夫・改善
- iii 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫・改善
- iv 教材研究の充実
～ 単元や題材のまとまりを見通した授業構想 ～
- v 系統性を踏まえた指導の充実
～ 小・中学校及び学年や教科間の連携 ～
- vi 「足利版 家庭学習の手引き『学びのすすめ』」等の活用
～ 家庭と連携した自主学習の習慣化 ～

② 学びの成長の把握

- i 毎時間の授業をつなぐ単元構想
～ 一人一人の学習の習得状況を把握し、次の学習に生かす工夫 ～
- ii 指導目標に即した観点別の評価規準の改善
～ 児童生徒の学習状況の継続的、総合的な評価の工夫 ～
- iii テストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果分析及び活用

③ 共に学び合う人間関係づくり

- i 一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級経営
- ii 意欲をもって学習に取り組める学習環境づくり
- iii 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくり

3. 協力校における取組

(1) 鹿沼市立さつきが丘小学校における取組

- ① 子どもの思考力・表現力の向上と学力の定着を目指した授業改善と指導力向上のための校内研修の実施
 - i 授業づくり
 - ii 「振り返り」を生かした授業改善
 - iii 知識を活用、発揮させるための手立て
- ② 大学の研究者との効果的な連携・協力による指導の充実
- ③ ティーム・ティーチングによる指導の工夫

(2) 足利市立山辺中学校における取組

- ① 個に応じた指導
数学科及び英語科における「少人数指導」の実践
- ② わかる、できるを実感する授業
「山辺中のユニバーサルデザインの視点」の作成
- ③ 協働性の基盤づくり
「ローテーション道徳」の実践

④ 創造性の基盤づくり

リーディングスキルの向上を図る取組

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 鹿沼市立さつきが丘小学校における取組の成果

各学年で研究をする学習内容に係る単元指導計画を見直し、それぞれの時間で育成すべき資質・能力を明確にした。また、授業の終末における「振り返り」では、児童がどのようなことを書けることを目指すのか、そのためにどのような問題を設定し、授業を展開していくことが考えられるかなど、算数の本質を大切にしたい授業づくりについて実践研究に取り組んだ。これらのことにより、「ねらい」を明確にもって授業を実践する意識が高まるなど、多くの教員が授業改善に対する手ごたえを感じていることがアンケート結果から推測される。

「振り返り」ワーキンググループによる取組では、低・中・高学年の発達の段階において、どのような「振り返り」ができるか、より効果的な「振り返り」にするにはどのような工夫ができるかなど検討してきた。それらの取組を継続することで、児童が自分の思いをよりの確に表現できるようになるなどの成果を確認することができた。

(2) 足利市立山辺中学校における取組の成果

今年度、事務職員等も含め全教職員が、都県の先進校（東京都荒川区立尾久八幡中学校・埼玉県戸田市立第二小学校等）を視察している。視察を通して学んできた各校の優れた実践を基に、山辺中学校の実態を踏まえ、課題解決に有効な手立てとなるよう、学校全体で実践と改善を繰り返してきた。主な内容として、ユニバーサルデザインの視点からの教室環境の工夫や数学科及び英語科における少人数指導、ノート指導及び構造的な板書計画の実践研究等、主に環境整備に関することが多くみられ、それらの取組についてはアンケート結果から、一定の成果がみられる。

また、文部科学省小栗英樹調査官や早稲田大学教職大学院教授田中博之先生による講話及び指導・助言により、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善として、「主体的とはどのようなことか」「学習指導に生きる学習評価の工夫」等について具体的な事例を基に演習を通して学び、今後の研究の方向性を全教職員で共有することができた。

2. 実践研究全体の成果

- ・ 全国学力・学習状況調査結果やとちぎっ子学習状況調査結果を関連付けた分析を行い、児童生徒の学力や家庭における学習状況等を把握することで、学校全体の課題を焦点化することができた。
- ・ 県教育委員会の指導主事が、授業研究会において指導・助言を行ったり、校内研修で講話・演習を行ったりすることで、学校の課題解決に向けた取組を支援するこ

とができた。

- ・ 平成30年度3月に県教育委員会が作成したリーフレット「授業改善に向けた3つの視点 ～学習評価を踏まえた授業の展開～」を軸として、市教育委員会と連携しながら市町教育委員会と関わることにより、「学習評価を踏まえた授業改善」に向けた取組の充実を図ることができた。
- ・ これまでの全国学力・学習状況調査の分析結果から明らかになった国語科及び算数科における課題解決に向けて、学力向上推進リーダーの実践を参考にした指導資料「授業改善プラン」を作成し、指導方法改善に向けた取組を推進することができた。

3. 取組の成果の普及

- ・ 県教育委員会のホームページに「学力向上通信」「パワーアップシート」等を掲載し、各市町及び各学校に対して調査結果の適切な活用や検証改善サイクルの運用に関するタイムリーな情報を県内全ての市町教育委員会及び学校に発信した。
- ・ これまでの調査の分析結果から明らかになった県全体の課題解決を図るため、学力向上推進リーダーの実践を事例として取り入れた小学校国語科、算数科における学習指導の改善・充実に向けた指導資料「とちぎの子どもの『確かな学力』向上のために 授業改善プラン」を作成し、県内全ての小学校に配布した。
- ・ 推進地区では、研究授業を公開したり、分析結果をもとにした啓発資料を作成したりすることにより、推進地区内の小・中学校に対して、取組成果の普及を図った。
- ・ 協力校では、調査結果を基に明らかになった課題を焦点化し、全教科・全学年の取組となるよう工夫して実践研究を推進した。

○ 今後の課題

- ・ 全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査における結果を各市町で実施されている学力調査等の結果と関連付けて比較分析するなど、各市町の状況や各学校の実態を踏まえ、検証改善サイクルの自校化を図っていく必要がある。今後も、県教育委員会は、学力向上通信等の資料や講話等による情報提供などを通して支援していく。
- ・ 新しい時代に必要となる資質・能力の育成に向けて、教師の指導力向上に向けた取組の充実をより一層、図る必要がある。今後も、これまでに作成した指導資料等を研修で活用するとともに、特に思考力・判断力・表現力等の育成に向けて、具体的な評価規準の設定など、学習評価を踏まえた学習指導の改善・充実について授業研究会等を通して支援していく。
- ・ 教育指導等の改善に向けた各学校の取組の充実に向けて、引続き、市町教育委員会との連携を密に図る必要がある。今後も、県教育委員会は、とちぎっ子学力アッププロジェクトと市町教育委員会の学力向上に向けた取組との整合性を踏まえ、市町教育委員会及び学校の課題解決に向けた主体的な取組を支援していく。

(様式2)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	鹿沼市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

○ 「振り返り」を生かした授業改善による思考力・表現力の育成

本推進地区では、授業づくりにおいて、授業が子供の「深い学び」となっているか、また学び合いにおいて、自己の考えを広げ深めることができているかといった、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を進めてきた。

アドバイザーによる講話や校内研修による授業づくりを通して、教員はこれらのことを理解することができたと考えるが、まだ十分に浸透していなかったり子供の学力が定着していなかったりする等の課題が残った。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を行い、確かな「振り返り」を実施することで、子供の知識が構造化され、知識の定着につながるのではないかと、学びの過程を価値づけることで、学習することの意義を認識し自己の変容を自覚することができ、主体的な学びにつながるのではないかと、教師側からは、子供のよりよい「振り返り」をイメージして授業づくりをすることが授業改善につながるのではないかと考えた。「振り返り」を生かした授業改善をテーマに研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の実現による児童生徒の思考力・表現力の育成、そして児童生徒の学力の定着を目指していきたい。

2. 研究課題への取組状況

(1) 指導体制の構築

大学の研究者や協力校の研究リーダー、市内研究学校のリーダー、及び市教育委員会の担当による「学力向上推進協議会」を設置し、研究の方向性や研究の評価等を協議したり、協力校への指導・助言をしたりした。

- ・ 研究の方向性及び内容の検討
- ・ 協力校課題推進委員との研究の方向性及び内容の検討
- ・ 研究内容の確認

- ・研究授業及び公開研究授業参観
- ・協力校における研究課題への取組状況の確認

(2) アドバイザーの配置

協力校と日常的に連携、協力しながら学力向上に対する指導・助言を専門的な観点から行うためのアドバイザーを配置した。

- ・アドバイザー：宇都宮大学教育学部准教授 牧野智彦先生

(3) 協力校校内研修への指導・助言

本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を行い、「振り返り」を実施することで、児童の学びの定着と主体的な学びにつなげることと、教師の授業改善につなげることを主目的としている。そこで、算数のねらいを大切に、「主体的・対話的で深い学び」を実現するとの視点から授業を質的に改善し、児童の思考力・表現力を育成していくこと、効果的な「振り返り」とはどのようなものを検証・実践していくことに焦点化し、校内研修への指導・助言をしていくこととした。

ア 本研究の概要の説明

協力校の全教員を対象に、研究の趣旨や研究の指導体制、鹿沼市及び協力校の学力に関する現状と課題、研究課題、取組内容、成果等の把握と検証の手立て等について説明した。

イ 授業づくりにおける指導・助言

本研究における授業づくりについては、指導者が授業を構想する段階から関わり、協力校とともに実施していくことを基本とした。

協力校では、昨年度も学校課題で「思考力・表現力を育てる」授業づくりを行ってきた。「主体的・対話的で深い学び」になることを目指して、子供同士の対話を大切にすることで、子供同士のやりとりがスムーズになり、自分の考えをもって伝えることができるようになってきたが、子供同士がやりとりをすることに主眼がおかれがちになり、算数科としてのねらいがあいまいだったのではないかと、本当の子供の考えに寄り添って授業をしているのか、という反省があった。

そこで、まず基本に立ち返り、教材研究をしっかりと行い、算数科として何を身に付けたらよいのか、そのためには何を考えさせたらよいのかをしっかりと検討し、その上で「主体的・対話的で深い学び」にするためには、どのような手立てが必要かを考えるという流れで、授業づくりを行っていくこととした。

思考力・表現力を育成するには、授業者が、思考力はどの時間、どのような手立てで育成するのか、表現力はどの時間か、とはっきりさせることで、よりの確かな指導ができると考える。まずは単元を見通し、育てたい資質・能力をどの時間どのような活動をして身につけさせたいのかを明確にしてから、1時間1時間の授業づくりを行っていった。

(4) ワーキンググループによる「振り返り」を生かした授業づくりの実践

協力校において、ワーキンググループによる「振り返り」を生かした授業づくりを行った。メンバー各自が算数の授業において「振り返り」を意識した授業を実施した。児童の振り返りの視点を、低・中・高学年でそれぞれ定め、児童の反応と変化を検証した。また、今年度の実践の成果と課題から、来年度に向けての取組を検討した。

(5) 研究内容の一般化を目的とした研修会の実施

市内小中学校教員を対象とし、協力校の研究内容やその成果を発表し、市内の小中学校へ研究を一般化していくための研修会を開催した。

実施日	内容	学年・教材等	授業者・指導者等	参加者等
平成30年 11月22日	公開授業 授業研究会	第1学年「ひきざん」	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 大田 里美教諭 ○指導者：宇都宮大学教職大学院教授 日野 圭子先生	さつきが丘小学校教員 市内小中学校教員等 計70名
		第4学年「面積」	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 手塚 裕也教諭 ○指導者：宇都宮大学教育学部准教授 牧野 智彦先生	
		第6学年「セットメニューの 組み合わせ方を考えよう」 (平成19年度全国学力学習状況調査 【数学B】問題の授業化)	○授業者：鹿沼市立さつきが丘小学校 大八木俊秀教諭 ○指導者：鹿沼市教育委員会指導主事 吉江 紫	
	講話	「数学的な見方・考え方を 働かせるために」	○講師：宇都宮大学教育学部准教授 牧野 智彦先生	市内小中学校教員等 計40名

(6) 中学校との連携

小学校の公開研究会に中学校の教員が参観し、また、中学校の研究授業には、同中学校区の小学校教員が参観して、それぞれの授業を見合う機会を設けた。お互いの授業を参観するだけでなく、授業研究において算数と数学の共通点と相違点やそれぞれの学校での授業の進め方等情報交換することで、小中それぞれの実態について把握し、小中のつながりを意識した指導ができるようにした。

	会場	参観学年・単元等
H30.11.15 (木)	鹿沼市立東中学校	3年 関数 $y = ax^2$
H30.11.22 (木)	鹿沼市立さつきが丘小学校	4年 面積、6年 学力調査 B 問題の活用
H31.2.15 (金)	鹿沼市立東中学校	1年 文字を用いた式

(7) 市民への情報発信

研究協力校の取組を、市内ケーブルテレビで放映し、広く市民に情報発信した。新しい時代に求められている資質・能力とはどのようなものか、それを育成するために、どのような授業を行っているのか、今学校で取り組んでいることを取り上げ放映してもらうことで、保護者、市民への啓発を図った。

放映番組：鹿沼トピックス「これからの社会で活躍する子どもたちのために
～ 授業力向上事業 ～」

放映期間：平成30年12月11日（火）～平成30年12月17日（月）

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 協力校における授業づくり

授業づくりにおいては、授業を構想する段階からアドバイザーを含む指導者が関わることを基本として実施した。

単元を通して計画的に育てたい資質・能力を育成すること、その上でねらいは何か、そのためにどのような問題で何を考えさせたらよいのか、という授業づくりのポイントが事前に示されていたこと、協力校の教員が、講話等によりそれらのことについて理解していたこと等から、意味のある授業づくりとなった。

また、「主体的・対話的で深い学び」にするために、子供の主体的な姿とは、対話的な姿とは、深い学びになるにはどのような子供の姿がみられることなのか、を検討しながら授業づくりを進めてきた。このことは子供の姿から授業を見直すことであり、子供主体の授業づくりにつながったのではないかと考える。授業のゴールでの児童の姿を見据え、そのためにどのような活動が必要かと授業を構想したことで、小手先の技術ではなく、本質を大切にしたい授業づくりができ、授業者の授業力の向上にもつながったのではないかと考える。

以上のような試みにより、協力校教員の授業づくりへの考えの変容が見られ、授業を構想していく力が育成されつつあると考えている。

(2) 協力校におけるワーキンググループによる「振り返り」を生かした授業改善の実践

協力校では、ワーキンググループによって、授業後児童に「振り返り」を書かせ、その内容から児童の学びを見取り、授業改善を行ってきた。ワーキンググループによる取組は、以下の通りである。

【ワーキンググループによる取組】

(低学年：2年生)

3つの視点で振り返りを行った。

- ① 今日の授業で分かったこと、新しく知ったこと
- ② 友達の発表や考えを聞いてわかるようになったこと
- ③ 次にやってみたいこと

<成果と課題>

○ねらいに即した振り返りができるようになった児童が一方、「〇〇ちゃんの発表がよかったです」等の表現にとどまり、内容について書けない児童もいた。

○最初は何を書いてよいか分からず、書くのが難しいので、初めはパターンを複数例示して、真似をしながら書くようにしたら、徐々に自分で書ける児童が増えていった。

○よい振り返りを児童に紹介したことで、「紹介されてうれしい」「私も紹介してもらいたいから、しっかり振り返りを書こう」を意欲付けが図られた。

○振り返りを書かせることで、授業中、友達が発言したことをよく聞くようになった。また、説明

することに抵抗を示さない児童も増えてきた。

●低学年は、表現する力が課題である。書かせながら、書き方の指導が必要。

(中学年：3年生)

授業の振り返りの場面で今日の授業で大切だったことを「キーワード」として出させ、その言葉を使いながら振り返りを書く。
キーワードになる言葉は、まとめに書かれるような言葉を出させた。

<成果と課題>

○大切な言葉をキーワードとして示すことを続けることによって、徐々に児童自身が、今日学んだ新しいことに気付けるようになり、キーワードを出せるようになった。

○振り返り続けることで、新しい知識に目を向けられるようになっていった。1時間の学習内容がすべて新しいのではなく、既習事項を使いながら新しい知識を得ていることに気づき、学習がステップアップしていくことが分かるようになってきた。

●授業者が学習の系統をどのくらい理解しているかによって、児童の振り返りにどのような言葉を返すかが変わってくる。

●授業後の振り返りだけでなく、学習の初めに前時の振り返りをする、学習途中で前時までの学習を振り返るなどの振り返りを意識することも大切である。

(高学年：6年生)

4つの視点で振り返りを行った。

- ① 今日分かったこと（めあてに対して）
- ② 友達とのかかわり（よさ、どのようにかかわったか）
- ③ 自分の気づき（自分を振り返る。間違っただけは～だったから）
- ④ これから調べたいこと、疑問

<成果と課題>

○振り返りの記入を続けることで、抵抗なく書けるようになっている。また、よい振り返りを紹介することで、振り返りの質が高まっている。

○③の気づきを書ける児童が増えてきた。

○児童の振り返りから次時の課題につなげることができた。（次の授業に生かすことができた）

●振り返りを書く時間を確保することに課題がある。

●児童の振り返りに対して、授業者がどのような視点でコメントを書くのが効果的か、研究の余地がある。

取組から、発達段階に合わせた振り返りの視点が必要であること、継続することで、児童が自分の思いをよりの確に表現できるようになること、振り返りすることで何をねらうのかによって、児童に返すコメントも変わってくることなどが明らかになった。

振り返りは、単に授業後に書かせる感想ではなく、その目的に応じて「振り返り」

のタイミングや方法は変わってくるものである。今後、振り返りをする目的は何か、その目的のためにどのタイミングでどのように振り返りをさせるか、効果的に行うために黒板やノートはどう活用するかなど、研究していきたいと考えている。

(3) 研究内容の一般化に向けて

研究内容の一般化を目的に、研修会を実施した。研修会では、協力校においての主体的・対話的で深い学びを目指した授業づくりを市内の小中学校に伝えることを目的としたものである。

研修会では、研究授業だけでなく、「数学的な見方・考え方を働かせるために」との題でアドバイザーによる講話を行った。新学習指導要領では、数学的な見方・考え方を働かせながら、目標に示す資質・能力の育成を目指すことを示していることから、講話の内容はこれからの授業づくりにおいて欠かせない視点である。

参会者からは、主体的・対話的な授業にするための教師の役割が分かった、「数学的な見方・考え方」についての理解が深まった、等の感想が寄せられ、目的に沿った研修会が実施できたと感じている。

4. 今後の課題

(1) 「振り返り」を生かした授業改善による思考力・表現力の育成の継続

平成30年度は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を行い、ワーキンググループによる「振り返り」を生かした授業改善の実践・検証を行ったり、算数科のねらいを達成するための授業づくりや「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行ったりすることを中心に、研究を進めていった。

平成31年度は、今年度の成果を基に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け「振り返り」をどう授業づくりに生かしていくか、児童の振り返りをどの観点で行わせ、それをどう見取って授業改善につなげていくか等、具体的に研究を深めていこうと考えている。

(2) 協力校の研究の取組内容への具体的な指導助言

平成30年度協力校では、本研究における取組の一つとして、授業改善や教員の指導力向上のための校内研修の充実を図っていった。

本研究は、年度途中からの開始であったため、協力校の課題の推進計画に沿って研究を進めてきた。協力校の課題と本研究の課題とが完全には一致せず、ずれを修正しながら取り組んできたが、完全に一致することはできなかった。また、期間が短かったため、取組に対して大きな変容を見ることはできなかった。

平成31年度は、校内研修の中で、計画の段階から研究課題との整合性を図り、推進していきたいと考えている。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【推進地区】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

推進地区名	足利市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

自ら学ぶ意欲を高め、自ら考え主体的に判断し、行動できる資質や能力を育成することは、生涯学習を充実させる上で非常に重要である。

これまでの全国学力・学習状況調査やとちぎっ子学習状況調査結果の分析結果から、学習意欲の向上や思考力・判断力・表現力等の育成を本市の重点的な課題として捉えており、県教育委員会が推進するとちぎっ子学力アッププロジェクトと合わせて、本事業を推進していくことで市全体の課題解決を図ることとする。

協力校への指導に当たっては、教師自身が指導内容に精通するという基本的な考え方のもと、調査結果等から把握できる児童生徒の実態を踏まえ、一人一人のよさや可能性を引き出し、生かしながら児童生徒が自ら学びとる過程を重視した学習指導の工夫・改善に努めることとし、以下の内容について取り組むこととする。

(1) わかる授業の展開

- ① 基礎的・基本的な内容を確実に身に付けるための指導の充実に努める。
 - ・児童生徒の実態の分析、ねらいの精選
 - ・何をどう学んだかがわかる板書の工夫
 - ・ねらい達成のための繰り返し学習や補充学習の充実
 - ・何を学んだかを振り返ることによる学習内容の確実な定着
 - ・ねらいに関する達成状況の確認と評価
- ② 思考力・判断力・表現力等を育成するための指導の充実に努める。
 - ・各教科・領域、各学年相互の関連を図った系統的な指導計画の作成
 - ・習得・活用・探究という学習プロセスの中での、体験的な学習や問題発見・課題解決的な学習、探究的な活動の充実
 - ・一人一人が考えを深めるための時間の確保
 - ・考えを深めるための練り合い、学び合いの場の設定
 - ・身に付けた知識及び技能を活用したり、多様な考えを引き出したりできる発展的な課題の設定
 - ・「総合的な学習の時間」と各教科等との関連を図った学習活動
 - ・観察・実験・レポート作成・論述・記録・要約・説明など、知識・技能を活用する言語

活動の充実

- ・「読書センター」「学習、情報センター」としての機能をもつ、学校図書館の積極的な活用
- ・ICT機器の効果的な活用
- ③ 自ら学ぶ態度を育成し、学習意欲を高めるための指導の工夫に努める。
 - ・主体的な学習に向け、ペア、グループなどの学習形態を積極的に取り入れ、深い学び合いを促す指導の工夫
 - ・学習内容に関して見通しがもてる導入の工夫
 - ・児童生徒の意欲を喚起する導入の工夫
 - ・児童生徒が興味をもって思考を深めることができる発問の工夫
 - ・一人一人の実態に応じて目標をもたせることによる意欲の喚起
 - ・学びの指導員等によるチーム・ティーチングや実態に即した個別指導の充実
 - ・授業で守るきまりの明確化
- ④ 教材研究を重視し、主体的に授業研究の充実に努める。
- ⑤ 縦と横の連携に努める。
 - ・学年や、教科間での連携を深め、指導内容の充実に努める。
 - ・小中学校9年間の学習の円滑な接続を踏まえ、指導内容の充実に努める。
 - ・小学校英会話学習の実践と、中学校での指導の工夫による英語教育の充実
- ⑥ 「足利版 家庭学習の手引き『学びのすすめ』」等を活用し、家庭と連携して、自主学習の習慣化に努める。

(2) 学びの成長の把握

- ① 一人一人の学習の習得状況を捉え、次の学習に生かすための方法を工夫し、学習内容の確実な定着に努める。
- ② 指導目標に即した観点別の評価規準を作成し、児童生徒の学習状況の継続的、総合的な評価に努める。
- ③ 基礎・基本の定着と学力の向上に向け、学習指導の改善のために、テストバッテリーや全国学力・学習状況調査等の結果分析、活用に努める。

(3) 共に学び合う人間関係づくり

- ① 一人一人の個性を尊重し、共に学び合う人間関係を育む学級づくりに努める。
- ② 意欲をもって学習に取り組めるような学習環境づくりに努める。
- ③ 教師と児童生徒、児童生徒同士の認め励ます言語環境づくりに努める。

2. 研究課題への取組状況

(1) 協力校へのかかわり

- ① 研究を推進するにあたり、協力校の実態と課題を校長や教頭、研究主任と確認し、本研究の方向性について確認した。
- ② 研究授業を行う際、市教委の指導主事が事前の指導案検討に加わり、指導助言を行った。
- ③ 協力校に訪問する前には、指導主事が本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題および方向性について話し合い、指導助言の内容を確認した。

- ④ 研究授業には、市教委、県教委の指導主事が訪問し、授業を参観した。分科会において、各授業に対する指導助言を行うとともに、全体会においては、本研究の進捗状況の確認と指導講評を行った。

かなふり松プロジェクトにおける学校訪問において各学校に伝えている、「導入の工夫（一人一人が『なぜだろう、やってみよう』と思うことができたか）」「展開（一人一人が自分の考えをもつことができたか）」「まとめ（一人一人が『わかった、できた』ことについて表現することができたか）」の3点に加え、特に「組織で課題解決を図ること」「表現力（書く、話す）の育成を図ること」などについての講話を行った。

- ⑤ 県教委と市教委で連絡を密に図り、本研究の進捗状況を踏まえ、成果と課題および今後の指導の方向性について共通理解を図った。

（2）推進地区の取組

本市の学力向上・指導力強化支援事業として、次の4点を柱とし推進してきた。

- ① 「学力向上コーディネーター及び指導主事による学校訪問」では、小・中学校9年間の学びの連続性を重視し、各校年間5回の訪問を実施した。主体的に学習に取り組む態度を養うためには、児童生徒が授業で「わかった」「できた」という自信を積み重ねることが大切である。そのため、訪問では「この授業で何を学ぶのか」という明確なめあての提示、考えを深めるための学び合いの工夫、理解したことを整理する振り返り等を重点として指導し、教師の授業力の向上を図ってきた。さらに2学期からは、全国学力・学習状況調査の結果から見えた本市の課題から、「学んだことを活用する発展的な問題を積極的に取り入れること」「自分の考えを自分の言葉で発表させたり、書かせたりする場を設定すること」の2点を視点に加え、教師の授業力の向上を図っているところである。学校では授業を互いに見合ったり、教材研究の時間を確保したりする等、日々の授業を見直し、授業改善に努めている。
- ② 「学習ボランティアの配置」については、退職された教員や補助職員、保護者や学生ボランティア64名の協力を得て、14校において、放課後や夏休み、土曜日等に学習会を実施することができた。宿題や自主学習等に意欲的に取り組み、わからないところはボランティアの先生に質問する等、児童生徒が自ら学習に取り組む姿が見られた。
- ③ 「先進地の視察」では、全ての指導主事がチームを組み、他県3市の教育委員会や学校の様子を視察し、本市の課題解決のための参考となる情報を収集することができた。具体的な取組事例として各学校へ情報提供するとともに、本市の取組に生かせる点について話し合い、次年度の教育施策に繋げていきたい。
- ④ 「家庭学習の手引きの作成及び活用」については、本市の児童生徒の実態と課題をもとに作成した、保護者用リーフレット「足利版家庭学習の手引き『学びのすすめ』」の活用を図った。各学校において、保護者に生活リズムの大切さや子供とのかかわり方、家庭学習のポイント等について説明し、家庭学習の啓発を図

った。また、公民館の各種講座や家庭教育懇談会等において、教育長の挨拶や市教育委員会事務局指導主事の講話等の場で取り上げ、周知した。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国学力・学習状況調査の結果分析

- ① 平成30年度の全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」では、国語A（主として知識）・国語B（主として活用）は、全国平均正答率との差が縮まり、数学A（主として知識）・数学B（主として活用）で、平成29年度の調査と比較すると全国平均正答率との差が広がった。今後も同一学年での経年分析を行うとともに、とちぎっ子学習状況調査等と併せて同一集団での比較分析を行っていく。

(2) 県が実施する「とちぎっ子学習状況調査」及び市が実施する「テストバッテリー」の結果分析

- ① 中学2年生が実施している「とちぎっ子学習状況調査」では、平成30年度と平成29年度調査結果を比較分析すると、社会以外は県との差が広がっている。
- ② 中学1年生が実施している「テストバッテリー」では、アンダーアチーバーが減少した。学力向上支援群も減少傾向が見られ、自分の能力に応じた学力を身に付け、発揮する生徒が増えつつある。

(3) アンケート等の実施及び結果分析

- ① 全国学力・学習状況調査の「児童に対する質問紙調査」では、「学習に対する関心・意欲・態度」「規範意識・自尊感情」「学習の基盤となる活動・習慣」の全ての領域で、肯定的に回答している生徒は国と同様の傾向が見られた。

これは、教師の日々の授業に対する意識の変化や指導方法の改善、及び家庭における学習習慣の向上が影響していると考えられる。

- ② 具体的には「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という質問に対して、肯定的に回答した生徒が1.1%増加した。これは、教師が主体的に自身の課題解決に取り組むとともに、生徒の実態をつかんで、かかわり方を意識し、授業改善を図ったことが要因として考えられる。

また、「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という質問に対して、肯定的に回答した生徒が6.3%増加した。これは、生徒が学ぶことの楽しさや価値と、自分のキャリア形成とを関連づける指導を積極的に行うことで、生涯にわたって主体的に学び続けようとする態度を育てたためと考えられる。

また、「普段（月～金曜日）、1日あたりどれくらい勉強していますか」という質問に対して「2時間以上している」と回答した生徒が3.1%増加した。これは、保護者との連携によって、今まで以上に家庭学習に力を入れ始めたことによる成果であると考えられる。

4. 今後の課題

- これまでの全国学力・学習状況調査の「教科に関する調査」から、国語科及び数学科のどちらの教科においても記述式の問題の正答率が低い傾向が見られる。この課題を解決するためには、単元を通して、自分の考えを自分の言葉で表現させる場や、身に付けた知識・技能を活用する学習活動を意図的に位置付けるなど、授業改善に向けた取組の充実を図る必要がある。
- 主体的に学ぶ児童生徒を育成するためには、教師が教材研究に励み、単元や一単位の時間の授業を構想する力を高める必要がある。今後も、授業づくりにおいては、ゴールを明確にした「めあて」の工夫や、授業の終末における振り返る活動（児童生徒がわかったことを表現し、身に付けたことを再構築する活動）の充実を一層大切にしていく。
- 小中学校9年間を見通し、系統性を踏まえ、指導内容・指導方法の充実を目指す必要がある。
- 家庭学習の習慣化を図るために、児童生徒が「わかった、できた、もっとやってみよう」と実感できるように、授業や放課後学習での個人差に応じた支援や、保護者に対して家庭学習の効果や重要性を伝え、協力を呼びかけるなどの工夫をする必要がある。
- 本研究で得た成果を、市全体に広めていく必要がある。協力校においては、継続して日々の授業実践で生かしていくこと、協力校以外の学校に対しては、「かなふり松プロジェクト」を通して、協力校での取組を参考としながら指導・助言していく。
- 次年度以降も、市の事業である「かなふり松プロジェクト」を通して、市内33校の学校に数多く訪問し、教師の指導力の向上に向け、いかに具体的な例示を基に指導・助言し、学校全体の取組の充実を図るかが課題であると考えている。

(様式3)

「課題発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県鹿沼市立さつきが丘小学校
------	-----------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成29年度全国学力・学習状況調査の教科に関する調査において、全国の結果と比較すると、国語、算数共に「活用」の力、すなわち、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な問題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力に課題があることが分かった。

質問紙調査の授業に関する質問で「当てはまる」と答えた児童の割合は、「話し合う活動はよく行っていたか」+14.0、「相手の話をよく聞き、自分の考えを伝えていたか」+14.3、「目標が示されていたか」+8.8、「まとめを書いていたか」+9.4といずれも全国平均より高く、「振り返りを行っていたか」の質問は-4.4と、全国平均より低かった。ここから、振り返りを十分に行っていないことや、求められている学び方は概ねできているが児童の学力と直接の結びつきが見られず、授業改善と学力定着のための手立ての工夫が必要であることの課題が見えた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 子供の思考力・表現力の向上と学力の定着を目指した授業改善と指導力向上のための校内研修の実施

ア 授業づくり

協力校では、学校課題を「子供と創る算数授業～主体的・対話的で深い学びを目指して」と題し、数学的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうなどの「深い学び」が実現できているかといった視点からの授業改善を試みた。授業の手法や技術の改善のみを意図するのではなく、この時間に身に付けたいものは何か、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」とは、どのような児童の姿なのかといった視点で、授業改善を進めていった。

具体的には、各学年で研究単元を設定し、単元全体や系統を意識した授業づくりをしていく。まずは、単元という一定のまとまりの中で、どの時間にどの能力を育成するのかを明確にするために、単元計画を見直し、育成すべき資質・能力をバランスよく配置する。

次に、それぞれの時間で、ねらいは何か、そのためにどんな問題を設定し、何を考えさせればよいのか、といった一連の教材研究をしっかりと行う。そしてその時間を「主体的・対話的で深い学び」にするためには、子供のどのような姿が見られるとよいのか、そのためにはどのような手立てが必要かを考え、授業を構想していった。そして、研究単元で学んだことを、他の授業にも派生させ、日々の授業づくりに生かしていく、という流れで授業改善を行っていった。

イ 「振り返り」を生かした授業改善

ワーキンググループにおける実践・検証を行った。それぞれの発達段階に合わせた振り返りの視点を設定・実践し、それが適切だったかどうか、児童の学びにどうつながったかの検証を行った。

振り返りワーキンググループメンバー：2年1組担任、3年1組担任、5年1組担任
学力向上推進リーダー、学習指導主任

ウ 知識を活用、発揮させるための手立て

全国学力・学習状況調査の教科に関する調査の「B問題」を授業化し、実践した。

実践例：第6学年「場合の数」の発展（平成19年度中学校B問題より）

(2)大学の研究者との効果的な連携・協力による授業の充実

大学の研究者をアドバイザーとして授業を構想する段階から指導・助言を仰ぎ、主体的・対話的で深い学びの実現と思考力・表現力の育成を目指した授業づくりをしていった。また、研究授業で指導をいただくことで、それまでの取組の評価をし、改善を図った。

(3)ティーム・ティーチングによる指導の工夫

学年の実態や全国学力・学習状況調査の分析を基に、学年ごとに定着が不十分な学習内容において、ティーム・ティーチングによる指導を実施した。学年の児童の実態や授業のねらいに応じて、コース別学習や習熟度別学習を取り入れた。

平成30年度 算数科 TT、習熟度別コース学習の実施状況

(基本の考え)

1年	TT	担任+県非常勤講師
2年	TT	担任+市非常勤講師
3年	TT	担任+学力向上実践加配教員・市非常勤講師
4年	習熟度別コース学習	3C4C（各クラスからラッココースを出す）
5年	習熟度別コース学習	3C4C（各クラスからラッココースを出す）
6年	習熟度別コース学習	1C2C（1クラスをイルカとラッコに分ける）

習熟度別コース学習の実施状況

4年		
学期	単元名	形態
	折れ線グラフと表	クラス
1 学期	角の大きさ	コース
	わり算の筆算（1）	学年コース
	垂直・平行と四角形	コース
	そろばん	コース
2 学期	大きい数のしくみ	コース
	わり算の筆算（2）	学年コース
	がい数の表し方	コース
	計算のきまり	クラス
3 学期	面積のはかり方と表し方	クラス
	小数のしくみ	コース
	変わり方調べ	コース
	小数のかけ算とわり算	コース
	分数	コース
	直方体と立方体	コース

※学年コースは、学年を解体し、3C5Cで実施

5年		
学期	単元名	形態
1 学期	整数と小数	クラス
	直方体や立方体の体積	コース
	比例	コース
	小数のかけ算	コース
	小数のわり算	コース
	合同な図形	コース
2 学期	偶数と奇数、倍数と約数	コース
	分数と小数、整数の関係	クラス
	分数のたし算とひき算	コース
	単位数あたりの大きさ	クラス
3 学期	図形の角	コース
	四角形と三角形の面積	コース
	百分率とグラフ	クラス
	正多角形と円周の長さ	コース
	分数のかけ算とわり算	コース
	角柱と円柱	コース

6年		
学期	単元名	形態
1 学期	対称な図形	コース
	円の面積	コース
	文字と式	コース
	分数のかけ算	コース
	分数のわり算	コース
	角柱と円柱の体積	コース
2 学期	およその面積や体積	コース
	比と比の値	クラス
	拡大図と縮図	クラス
	速さ	クラス
3 学期	比例と反比例	クラス
	並べ方と組み合わせ方	クラス
3 学期	資料の調べ方	コース
	量の単位のしくみ	コース

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 授業改善と指導力向上のための校内研修の実施

ア ねらいを明確にした授業づくり

授業をつくっていくにあたり、単元や題材という一定のまとまりの中で、育成すべき資質・能力をバランス良く配置し、意図的・計画的に取り組む必要がある。そこで各学年で研究単元を設定し、まずその単元計画を見直して、どの時間でどのような資質・能力を育成するのかを明確にした。そして、それぞれの授業のねらいは何か、どんな問題を設定し、何を考えさせればよいのかを考え、授業の最後では児童のどのような姿が見られるとよいかを見出し、それを「単元構想シート」としてまとめた。その上で、「主体的・対話的で深い学び」にするためには児童のどのような姿が見られるとよいか、そのためにはどのような手立てが必要なのかを考えることで、小手先の手法や技術ではなく、算数の本質を大切にしたい授業を構想することができた。

<単元構想シートの例>

単元構想シート 「比べ方を考えよう(2)」(5年)

- (1) 本単元につながる既習の内容
 ・折れ線グラフと表(4年) 小数のかけ算とわり算(4,5年) 分数と小数、整数の関係(5年) 単位量あたりの大きさ(5年)

(2) 指導計画 全 13 時間

①割合を用いて比べること (p.54~56)	②割合を求める式・1を超える割合 (p.57)	③百分率・歩合 (p.58~59)	④基準量と割合から比較量を求めること (p.60~61)	⑤比較量と割合から基準量を求めること (p.62~63)
<p>□ めあて(観点) 入った数もシュートした数もちがうときの比べ方を考えよう。(関・考)</p> <p>□ 問題 4試合のうち、シュートがいちばんよく成功したといえるのは何試合めですか。</p> <p>□ まとめ もとにする量(シュートした数)を1とみたとき、比べられる量(入った数)がどれだけにあたるかを表した数を、割合という。</p> <p>□ 振り返り ・入った数かシュートした数のどちらかをそろえれば比べることができる。</p> <p>・割合について今まで聞いたことがあったけど、算数の世界ではどうということなのか考えていきたい。</p> <p>割合について知っているとや、イメージを話し合う。</p>	<p>□ めあて(観点) 比べ方をまとめよう。(知)</p> <p>□ 問題 4試合のうち、シュートがいちばんよく成功したといえるのは何試合めですか。</p> <p>□ まとめ 割合=比べられる量÷もとにする量</p> <p>□ 振り返り ・シュートした数を1とみたときの入った数がどれだけにあたるかということをもっと考えたい。</p> <p>・割合はもとにする量を1とみたときにもう一方がそれのどれくらいなのかを表したものの。</p>	<p>□ めあて(観点) 人数の割合を百分率で表そう。(関・知)</p> <p>□ 問題 あおいさんの学校の5年生の人数は80人で、サッカークラブに入っている人数は12人です。5年生の人数をもとにした、サッカークラブの人数の割合を求めましょう。</p> <p>□ まとめ 割合を表す0.01を1パーセントといい、1%と書く。パーセントで表した割合を、百分率という。</p> <p>百分率…もとにする量を100とみた割合の表し方 割合の1…百分率で表すと100%</p> <p>□ 振り返り ・割合と百分率は考え方は同じ。割合はもとにする量を1とみたもので、百分率はもとにする量を100とみたもの。もとにする量の1とみるか100とみるかの違いがある。</p>	<p>□ めあて(観点) もとにする量と割合から、比べられる量を求める方法を考えよう。(考・技)</p> <p>□ 問題 飲み物は全部で300mLです。このうち、果じゅうが20%ふくまれています。飲み物に入っている果じゅうは、何mLですか。</p> <p>□ まとめ 比べられる量=もとにする量×割合</p> <p>□ 振り返り ・20%は0.2にあたるということだから、百分率を割合に直してもとにする量にかければ求めることができる。</p> <p>・百分率の20%と割合の0.2は同じ意味を表している。</p> <p>・割合は百分率という表し方もある。でももとにする量のみかたの違いで、考え方は同じ。</p>	<p>□ めあて(観点) 比べられる量と割合から、もとにする量を求める方法を考えよう。(考・技)</p> <p>□ 問題 1週間前に生まれたねこがいます。このねこの体重をはかたら、188gでした。188gは、生まれた直後の体重の180%にあたります。このねこの、生まれた直後の体重は何グラムですか。</p> <p>□ まとめ もとにする量を求めるときは、□を使って、比べられる量を求めるかけ算の式に表すと、求めやすくなる。</p> <p>□ 振り返り ・なんの量を表しているのかわからないときには数直線や図を使って考えると分かりやすい。</p> <p>・割合はもとにする量と割合と基準量がどれなのかをきちんと見分けることが大切。迷った時には、図や数直線で考えるとよい。</p>

授業後の児童の姿を明確にし、このような姿が見られるためにはどのような授業を行ったらよいかという視点で授業づくりを行った。

(2) 校内研修の充実を図った結果から

授業づくりについて、研究単元にてどのようなことを学んだか、その後の授業にどう生かしていったかについて、教員にアンケート調査を実施した。調査結果から、研修や授業づくりを繰り返す中で、子供の意見を生かさないでいく子供主体の授業について学んだ等の意見が見られたり、ねらいを明確にもって授業をしている意識が高まったりと、多くの教員が授業改善に対する手応えをもてたようである。

<校内研修の振り返りから>

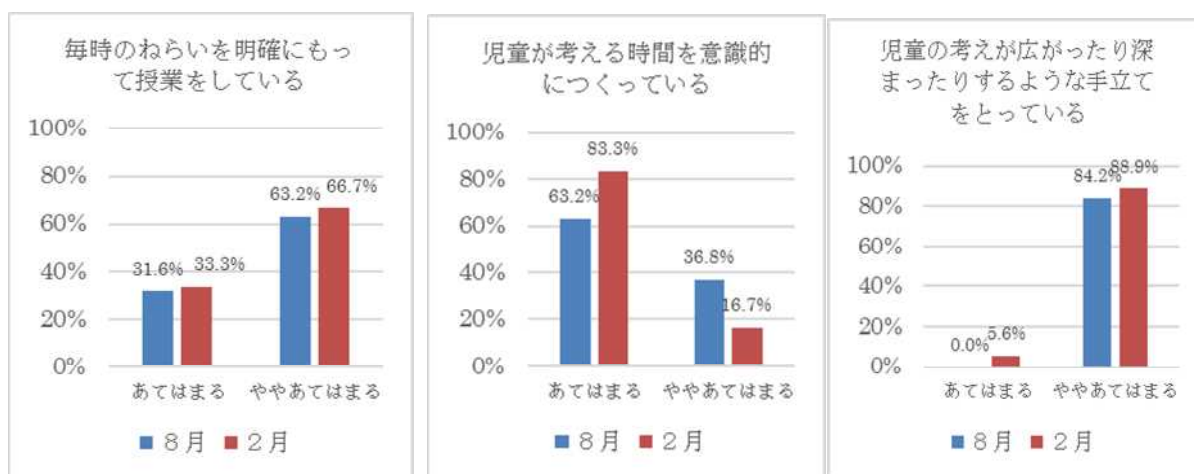
【思考力・表現力を育成するために工夫したことについて】

- ・数図カードやおはじきなどいろいろな教具を使い、子供たち一人一人が選び、自分のやりやすい、表現しやすい方法で自由に考えさせた。（1年担任）
- ・それぞれの考えを数図に置き換えることで、互いの考えを共有できるようにした。（1年担任）
- ・個人で考える時間を十分に確保し、また考えを表現できるようにワークシートの工夫を行った。（2年担任）
- ・毎時間振り返りを行うことで、自分と友達の意見を比べたり、友達の考えのよさに気づいたりすることができた。回数を重ねるごとに、振り返りの書き方や友達の考えのポイントが自分で書けるようになってきた。（2年担任）
- ・みんなができるようになることを意識し、ショートステップでの指導を取り入れてきた。表現が苦手な児童も、小さな積み重ねによって、少しずつ表現できるように指導してきた。（3年担任）
- ・スクールプレゼンターのアニメーションを活用することで、算数の苦手な児童の理解を助け、学習指導の効果を高められるようにした。（3年担任）
- ・友達の意見をリピートさせたり、別の児童に説明をさせたりした。（4年担任）
- ・教師がわざと間違ったり、簡単に児童の意見に納得しなかったりすることで、児童の考えに揺さぶりをかけた。（4年担任）
- ・本時の課題を吟味した。児童から問いが生まれるよう工夫した。（5年担任）
- ・児童が発表をすべて一人でするのではなく、続きを考えさせ、つなげて発表する機会を設けた。（5年担任）
- ・全体での話し合い活動では、教師ができるだけ児童の意見をつなぐ役割を担うように努めた。わかりやすく友達に伝えるためにはどうしたらよいかということを、日々考えさせる言葉かけを行った。（6年担任）
- ・思考の過程を明確に説明できることを求めたことにより、問題の答えだけでなく、答えを導く過程を重視する児童が増えた。（6年担任）
- ・道具を自分たちで操作する活動を取り入れて、体感的に理解し、量感を捉えることができた。（特別支援学級担任）

【今後の授業に生かしていきたいこと】

- ・子供たちの見取りをスムーズにするために、考えを予想しておくこと。（1年担任）
- ・振り返りを書かせることの継続。（2年担任）
- ・学び合うことの意味、グループ活動の意味を児童に伝えていき、みんなで分かることのよさを児童が感じ取れるようにしていきたい。（3年担任）
- ・思考ツールとしてホワイトボードを活用したが、引き続き活用法を学んでいきたい。（4年担任）
- ・今求められている資質・能力を育成するため、単元に入る前に全国学力・学習状況調査の過去問題を事前に見て、指導に生かすこと。（5年担任）
- ・自分が分かるだけでなく、みんなが分かることを意識してできるようになったので、グループ活動の在り方は、算数のみならず全ての教科で取り入れたい。（6年担任）

<アンケート調査から>



「毎時のねらいを明確にもって授業をしている」「児童が考える時間を意識的につくっている」の問いでは、2月の調査で肯定的な回答をした教員が100%となった。また、「児童の考えが広がったり深まったりするような手立てをとっている」の質問でも、2月の調査では、研究開始時の8月に比べ肯定的な回答が増えた。ここからも、授業者が授業のねらいや子供に何を考えさせたらよいのかということを大切にして授業をつくっていかうとしている意識がうかがえる。

(3) 「振り返り」ワーキンググループによる取組

低・中・高の発達段階において、どのような振り返りができるか、より効果的な振り返りにするにはどうしたらよいかを検証した。

取組から、発達段階に合わせた振り返りの視点が必要であること、継続することで、児童が自分の思いをよりの確に表現できるようになること、振り返りをする中で何をねらうのかによって、児童に返すコメントも変わってくるなどが明らかになった。

「振り返り」は授業後に文章で書くものだけに限らず、その目的によって振り返るタイミングや方法が変わってくる。今後は、このことも視野に入れながら、児童の学力や意欲につ

ながる効果的な振り返りとは何かについて、検討し、実践していきたい。

(4) ティーム・ティーチングによる指導の工夫

習熟度別の学習においては、特に低位の児童が自分たちのペースで学習することができ、安心して学習に取り組めた。また、一斉指導では、算数の得意な友達の考えに頼ってしまう傾向があったが、習熟度別にするすることで、特に低位の児童が、自分の問題として真剣に考える姿を見ることができた。また、1C2Tで行いT1とT2を入れ替えて行うことで、お互いの授業を見合ったり、算数専門の教員の授業を見て学んだりすることができ、教員自身の授業力向上にもつながった。しかし、習熟度別にするすることで、低位の児童が高度な意見に触れられないというデメリットもあり、意図的な導入が必要である。

4. 今後の課題

(1) 「振り返り」を生かした授業改善

今年度の取組では、「振り返り」について、ワーキンググループで先行実施・検証を行ってきた。そこで得られた成果と課題を元に、来年度はその取組を全体で行い、「振り返り」の効果と有効的な活用について、実践・検証を進めていきたい。

単に授業の感想を書かせるのではなく、今年度の取組を基に、「振り返り」を何のためにするのか、目的に合った振り返りになるよう、方向性を明らかにする。また、子供の変容だけでなく、教師の意識の変容も探っていき、次時以降の授業づくりや指導に生かしていけるようにしたい。

(2) 授業改善や指導力向上のための校内研修の推進

協力校では、その時間のねらいは何か、そのためには何を考えさせればよいのかという算数科の本質を大切にしながら、「主体的・対話的で深い学び」とは、児童のどのような姿が見られることなのか、そのためにはどのような手立てが必要か、という視点で授業改善を進めてきた。

教員のアンケート調査から、研修や授業づくりを繰り返す中で、多くの教員が授業改善に対する手応えをもてたようであるが、児童の学力に大きな変化は見られていない。すぐに結果を求めるのではなく、継続して取り組むことで、児童の意欲の向上、そして学力の向上につなげていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成30年度委託事業完了報告書【協力校】

都道府県名	栃木県	番号	09
-------	-----	----	----

協力校名	栃木県足利市立山辺中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成29年度全国学力・学習状況調査から、国語Bは全国と比較すると－6.2ポイント、数学Bは－9.1ポイントであり、活用問題において低い傾向にあった。また、国語A、数学Aについても、全国平均を－5～－9ポイント近く下回っていることから、基礎的な知識及び技能の習得や思考力、判断力、表現力等に課題がみられた。

さらに、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問調査の結果から、自分に自信がもてない生徒が多いことがわかった。これは、学校や家庭で学習のことについてほめられる機会が少ないという事実に基づいている。そこで学校と家庭が連携を深め、認め励ますことで、自己肯定感を育成し、学習意欲を高めていくと考えた。

2. 協力校としての取組状況

「先生が変われば、生徒が変わる」の考えのもと、教師の資質・能力の向上を重視した取組を進めることとした。

そこで、『先進校への訪問研修』を計画的に行った。事務職員等を含めた本校全職員が先進的な取組を行っている小・中学校を訪問し、その取組を勉強してきた。埼玉県戸田市立第二小、入間市立藤沢南小、東京都荒川区立尾久八幡中、渋谷区立広尾中、青梅市立第一中などを訪れ、リーディングスキルの向上、プログラミング教育、英語教育、少人数指導、教科教室型学習、小中連携、ユニバーサルデザイン、道徳教育等の取組を研修するとともに、恵まれた設備（人工芝・LED・タブレット端末等）を見学した。

また、9月には戸田市立第二小の校長と研究主任を山辺中へ招いて、講話や協議の時間を設定し、研究を深めた。今年度は先進校の良いところを山辺中に合った形で取り入れ、教職員の理解を深めるとともに、実践に努めた。

（取組1）個に応じた指導：『ひとりひとりに目を向けた指導（少人数指導）』

今年度は、2年生の数学、3年生の英語で少人数指導を行っている。1学期は1クラスを2つに分けて行ったが、2学期からは2クラスを3つに分けて実施している。生徒ひとりひとりに目が届き、個に応じた細かな指導を行うだけでなく、教師同士が連携を密にして取り組まなければならないため、指導力の向上にもつながっている。

また、教科指導についての情報交換等を行うため研修の機会も増えた。さらに、単元によってクラス分けを変えることもできる等、ひとりひとりの生徒により一層目を向けたきめ細かい指導を行うことができる。

(取組2) わかる、できるを実感する授業：『山辺中のユニバーサルデザインの視点』

図1に示すように「山辺中のユニバーサルデザインの視点」を作成した。例えば、掲示物には生徒に興味や関心をもって欲しい情報を「示し続ける」という役割がある。

しかし、前面黒板の周辺にさまざまな掲示物を貼ることは、同時に、学習への集中を妨げる視覚的な刺激にもなってしまふ。特に、視覚的な刺激に反応しやすい生徒には、黒板周辺の掲示物に工夫が必要である。

そこで、それらの刺激を排除することが学びやすい環境作りとして重要であると考え、山辺中では4月から教室の前面黒板の周辺の掲示物を取り去って、「すっきりとした黒板周辺」にした(図2)。掲示物は教室の後面や側面にきれいに掲示し、時計も側面に移動した。

また、「山辺中のユニバーサルデザインの視点」には、全ての生徒が授業に参加できる工夫として、環境面だけでなく、ヒントカードの活用やワークシートの工夫なども取り入れることとした。

山辺中学校のユニバーサルデザインの視点

教室環境づくり		
項目	概要	具体例
① 掲示物の配置	<ul style="list-style-type: none"> ・集中し、落ち着いて学習に取り組む環境にするには、教室の利便性を高める必要がある。本館の注意をそらすりたりの注意を妨げるような掲示物を掲示(掲示)を取り除き、必要な情報に集中できるように掲示物を取り除く。 ・目障りな掲示物を取り除く。 ・必要でなければ掲示物を取り除く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示物を取り除き、壁に目障りな掲示物を取り除く。 ・掲示物を取り除く。 ・掲示物を取り除く。
授業づくり		
項目	概要	具体例
① 授業の進捗の表示	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の進捗を把握し、学習の進捗を確認できるように表示する。 ・授業の進捗を確認できるように表示する。 ・授業の進捗を確認できるように表示する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の進捗を確認できるように表示する。 ・授業の進捗を確認できるように表示する。 ・授業の進捗を確認できるように表示する。
② 黒板の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板の周囲は、視覚に誘引、思考を促す工夫をします。そのまますべての掲示物を取り除き、黒板の周囲に工夫をします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板の周囲に工夫をします。 ・黒板の周囲に工夫をします。 ・黒板の周囲に工夫をします。
③ 掲示物の配置の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。 ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。 ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。 ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。 ・掲示物の配置は、学習に集中させるために、注意を分散させ、生徒の学習意欲を高め、学習意欲を高める工夫をします。
④ 黒板の配置	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての生徒が授業に参加できるように工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての生徒が授業に参加できるように工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。 ・学習意欲を高める工夫をします。

図1 山辺中のユニバーサルデザインの視点



図2 すっきりとした黒板周辺

(取組3) 協働性の基盤づくり：『ローテーション道徳』

学期に一度、各学年の担任教師が2人組をつくり、2人で同じ題材について指導方法等を研究して、担任しているクラスに加え、担任外の他のクラスでも授業を行うものである。ローテーションして教えるので、「ローテーション道徳」と名付けた。

担任による授業だけでなく、担任以外の教師からも道徳の授業を受けることで、価値の追求が深まるとともに、道徳教育が全校体制の取組となり、教師と生徒たちの間に、よりよい人間関係が生まれると考える。また、この取組は、教師の指導技術を磨くことにもつながる。

(取組4) 創造性の基盤づくり：『リーディングスキルの向上』

文章問題を正しく理解するために、作図等の活用を図ったり、ワークシートに頼らずノート指導を充実させることで自ら考える態度を育成することに努めている。また、穴埋め形式で考えるジグソーパズル型から、記述式で答えるレゴ型学習への転換に努めている。

3. 取組の成果の把握・検証

個に応じた指導（少人数指導）について、2年生にアンケートを行うと表1に示すような結果になった。当然だが、数学については5割以上の生徒が「よくわかるようになった」または「わかるようになった」と回答し、生徒ひとりひとりに目が届き、個に応じた細かな指導を行うことができたと考えられる。

教師側の感想では「1人の生徒を3人の教師の目で見ることができるのが良い」という意見があった。また、表2に示すように全職員のアンケートでも個に応じた指導の充実が実感されている。

「わかる、できる」を実感する授業については、環境面はほぼ100%整えることができた。しかし、生徒の思考を手助けするヒントカード等、積極的な支援については多くの教師が今後の課題として挙げている。

『ローテーション道徳』については多くの教師が肯定的で、指導技術も磨くことにつながるという感想が多かった。

創造性の基盤づくりについては、今後もノート指導をするとともに、構造的な板書になるよう取組を進める必要がある。また、表3、表4に示すアンケート結果から、思考力を育む指導が授業の中で十分に進んでいないといえる状況である。今後は、アンケートだけでなく、定期考査の問題や単元末における評価問題等を通して、実際の生徒の変容から計画的に検証していくことが重要であると考えている。

表1 少人数にして数学の授業はどうか？

よくわかるようになった	14%
わかるようになった	38%
少しわかるようになった	23%
かわらない	25%

(2年生生徒)

表2 個に応じた指導は充実しているか？

十分に充実している	23%
おおむね充実している	58%
不十分である	19%

(全職員)

表3 授業において思考をともなう発展的な課題を設定しているか？

十分に設定している	9%
おおむね設定している	61%
不十分である	30%

(全職員)

表4 考えを発表する機会では、うまく伝わるよう、資料や話の組み立てなどを工夫していた。

	平成30年度全国調査 (3年生生徒)	平成30年度県版調査 (2年生生徒)
当てはまる	12%	6%
どちらかといえば、当てはまる	34%	40%
どちらかといえば、当てはまらない	36%	35%
当てはまらない	18%	29%

4. 今後の課題

- ① 授業の中で「山辺中のユニバーサルデザインの視点」に示された積極的な支援を行う。
- ② 『ローテーション道徳』を生かし、「考え、議論する道徳」が展開される授業づくりについて指導技術を磨く。
- ③ 毎時間でなくてよいが、思考や活用を伴う授業を増やす。また、それを可視化する取組（構造的な板書等）を行う。
- ④ 毎時間の振り返りで、書かせたい「望ましい生徒の表現」を想定し、本時のゴールを意識して授業を行う。

基盤づくりなどハード面については整いつつあるが、次年度以降、生徒の資質・能力の育成に向けて、日々の授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点から、具体的に、どのように改善・充実を図るかが課題であると考えている。

そこで、次年度における学校全体の取組の推進に向けて、より方向性を焦点化できるように、平成31年2月に早稲田大学教職大学院教授の田中博之先生から、様々な学校での実践例を基に「指導に生かすための、学習評価の充実」について御講話をいただいた。講話を通して、

- ・ 日々の学習指導において、特に、思考力や判断力、表現力等を育成する際には、授業者が評価の判断基準をどれだけ具体的に設定しているかが重要であること
- ・ 新しいユニバーサルデザインの考え方として、ヒントカード等を用意するなど、誰もが主体的な学びになるよう工夫をすること

などを確認することができた。特に「指導に生かす評価の充実」については、これまで1月に協力校訪問でお越しいただいた文部科学省小栗英樹調査官の講話や、県及び市教育委員会担当指導主事による指導助言等で話されていたことと同じ内容であり、改めて、大切なことを全教員で確認する機会となった。このように、授業づくりにおいて大切なことを全教員で何度も確認できた意義は大きいと感じている。

次年度は、「学習評価の充実からの授業改善」を大きなテーマとし、ボトムアップによる学校全体の取組を通して、本校の生徒の資質・能力の育成に向けて取り組んでいきたい。